ひまわりからのメッセージ

122号

2021.11.8.

NPOひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター

発行人：中野たみ子

目は口ほどに・・・・

二週間ほど前のことです。ある講習会が開かれ、参加しました。受付の方が忙しそうだったので、少しお手伝いをさせていただきました。会場に来られる方に「受付はあちらになります」とご案内をしていましたら、年配の方が私の旧姓を呼ばれるのです。「はい、そうですが、貴方は…」とたずねてみると、何と中学と高校が一緒だった方でした。

この前お会いしたのは、お子さんが生まれて南宮大社にお詣りに来ておられた時でしたから、もう四十年近くお目にかかっていないのです。お互いに歳月を重ねていますし、今はマスクをしていますから、何故、私だとわかったのか不思議に思い、たずねてみました。久しぶりに会う方々の多くは「長髪と雰囲気」と言われることが多く、検査で出会った子どもたちの中には、右あごにあるイボを覚えていたと言う子もいます。でも、その方は「目です」と言われたのです。この答には驚きました。四十年も前の私の目と今の目に共通しているものは何だろう。自分の目は自分では見えませんが、昔から「目は口ほどに物を言う」と言われますから、その方は、私の目から何かを感じとられていたのかもしれません。

そんなことがあって、つい先日、私は清流プラザにいました。県の文芸祭の審査員が当たっていたのです。その日は県内の特別支援学校の生徒さんの作品展示もあり、その中になつかしい子の名前もあって、うれしく鑑賞しました。その時「中野先生！」と呼ぶ声がしました。「Hです。」と名乗ってくれたのは、以前二度程会って相談にのった生徒さんで職業訓練校に通っているとのことでした。「どうして分かったの。」とは聞きませんでしたが、彼の印象に残っていたのは果たして何だったのでしょう。私が評しがっていると思ったのか、彼はマスクを外して顔を見せてくれました。

秋も深まって来て、庭先の金木犀がやさしい香りを運んでくれています。柿も色づき、山茶花も咲きはじめています。コロナ禍で窮屈な生活を強いられてきましたが、宣言が解除されて、少しずつ日常が戻ってくるような気がします。このまま感染が拡大しませんように。子ども達の楽しい笑い声がとび交う学校生活が戻ってきますように。そしてマスクなしで素顔のままで人と関われる日々が一日でも早く訪れますようにと祈るばかりです。

ひきこもり
～生き難さを抱えて～

先日、ひきこもりの会議に出ていましたら、ひきこもっている人の半数以上に不登校の時期があり、発達障がいの人もかなりの数にのぼるという発言がありました。もちろん、現在どの位の人たちがひきこもりなのか実数は分かっていませんから、色々な所に相談された人の中でということになるのでしょうが、学生時代から困りや生き難さを抱えていたのだと考えると、私たちに出来る支援の手立てはなかったのだろうか…と考えさせられます。

ただ、その人たちが自室にこもって外には一歩も出ないということではなく、買物など自分で必要な外出はするのだけれど仕事はせずに家で自分の好きなことをして過ごしているということのようです。今は、家の中でゲームやユーチューブなどの楽しいこともたくさんありますから、両親に食べさせてもらって生活には困らず、自分の楽しみに没頭できれば、そんな良いことはないのかもしれません。ご両親の病気や死去によって働きに出るようになった人もおられるようですが、それならもっと早くに…と思われる方もあるのでしょう。

乳児期の気づき

ずいぶん昔から「早期発見・早期療育」ということばが盛んに使われて来て、いわゆる障害の早期発見、障害の決めつけだと批判する人も多くありました。私は、早くに気づいてあげることで子育ての見直しや子育て支援につながると考えているのですが、そのためには、アドバイスする側の保健師さんや、保育士、療育士の専門性が必要になります。

脳の可塑性ということを考えると、おそらく乳児期は大切な時期でしょうし、その頃の視線の合いにくさや共感のなさは最も気にかけておきたい事といえます。

名前を呼ぶと振り向く（呼名反応）大人が指さした物の方を見る（共同注意）などは保健師や療育者の間では早期の気づきとして観察されるものですが、一般にはまだまだ知られていないことかもしれません。

検査の中で気づくこと

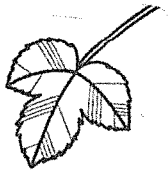
私は年間多くの子どもたちの検査を頼まれます。知能指数で言うと七〇～八〇代後半の子が多いように思います。ただ

幼児の中は平均値もしくはそれ以上という子どもたちが少なからず入っています。その子たちは、おそらく保育士の目からは「ちょっと変わった子」と映っていたり、「扱いにくい子」と思われたりしているのでしょう。

「何か新しいことをやろうとすると不安で泣き出します。」とか、「友だちと上手にかかわれません。」とか、「色々と知識はあるのですが会話が噛み合わず、自分の知っていることをずっと話します。」等々、何か異和感を感じて検査の依頼をされるのでしょう。

さて検査返しの時です。私はできる限りお母さんの子育てにアドバイスをするようにしているのですが、中には「うちの子はよく分かっています。色々なことをよく知っていますし……」等々、本当は社会性やコミュニケーションの困りを知っていただきたくても意に介さない方もいらっしゃいます。IQの高さだけで心配ないのだと思われるのでしょう。そんな時、この子はどの様に育って大きくなっていくのだろうかと不安を覚えます。自分の思い通りに要求を通そうと大声を出したり物を投げたりしていくことはないだろうか。人に負けるのが嫌で負けた時には感情を爆発させるのではないだろうか。自分よりも劣っていると思う友だちにきつい言葉を浴びせかけたりしないだろうか。周りのことに気づかず自分中心に考えてしまって、周りから浮いてしまうことはないだろうか。出来そうにないと思うと挑戦することをやめてしまって、わがままな子だと思われて叱責されることが多くなるのではないか。他の人の気持ちを思いやることが出来る子に育つのだろうか。この子が興味をもつことを共通に話せる友人ができるのだろうか……等々、老婆心ながらそんなことを考えてしまうのです。心配が大きい時には名刺を手渡して「いつでも相談して下さいね。」と言うのですが、今までの相談は多くはありませんでした。

子育ての基本は子どもと向き合うこと



「ゲームやユーチューブばっかりやっていて、言うことを聞きません。」「宿題をやり出すまでに時間がかかります。」「悪いことばかりしていて怒ってばかりです。」

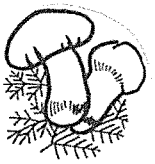
そうですか…… でも安易にスマホやタブレットを渡して、子守りをさせていませんでしたか？ お母さんやお父さんと一緒に思いきり外で遊んだり、一緒にホットケーキを焼いたり、やきそばを作ったりしたことってありますか？ 何より家庭のルールはありますか？

「私は仕事で忙しいんです。子どもとの時間なんて取れません。この子を良くしてくれる所はないですか？ 預けたいです。」

おやおや、それは困りました。親の愛情というのは、物を与えておけば良いというものではありません。厳しさと慈しみです。お子さんが一番望んでいるのは、ご両親の愛情だと思いますが……。な

んて言うと叱られそうですが、小学校低学年の頃こそ親のふんばり時だと思うのです。親としての生活スタイルを見直してみませんか？勉強しろ、宿題しろと言う前に、お子さんとの対話、無くしていませんか？

コロナ禍の休校の後に・・・・



コロナ禍で休校が続いた結果不登校になってしまったという中学生のことが新聞に掲載されていましたが、コロナは私たちの日常に様々な影響を及ぼしました。夫婦関係にも親子関係にも微妙に影を落としたと思います。私の友人の一人は精神病になり、治療のために転居したのですが、私を含め誰しもがこの社会の中で病んでしまうことはあるはずです。

学校への行きしぶりや不登校、引きこもりなど、単にその人自身の問題ではありません。ただ、もしその児の特性ゆえに引きおこされてしまう事があるとしたら、その生きづらさを軽減していける手立てを私たちは探っていかなければいけないと思います。

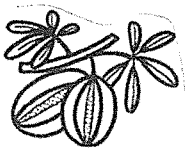
幼児期の気づきは、家族と共に考える子育て支援のスタートです。保健センターや園、療育機関の専門性が問われます。次に、小・中学校では、学習の習得のみならず社会性やコミュニケーションにも配慮が必要ですが、こじれてしまっているケースでは、一筋縄ではいきません。行動分析の手法などが必要になってくるでしょう。

「居場所づくりと言うけれど？」

先日、S.E.N.Sの会の研修で小栗先生が居場所づくりということに関して「居場所は自分の中に在る。自分が自分を受容できるかどうか。」とおっしゃっていました。そして外的な居場所は、特定の場所に行った時「待ってたよ」と言ってもらえる所だとも言われました。自分で自分が受容できるかどうかということは、自分を知っていないとできないことです。

子どもを取り巻く大人たち自身が自分を見つめ、自分の生き方に真剣に対し合っているのかどうか、ハッとさせられた発言でした。子どもを育てるということは、究極的には人としての自分にむき合っていくことなのでしょう。

お知らせ



・NPOひまわりの花は県の委託事業である「西濃圏域発達障がい支援センター」を任っておりますが、このたび十一月末日をもって宮川多津代が退職します。

・十二月のセンター親の会例会は十三日(月)九時半～です。会場はスイトピアセンター六一三です。